碁盤の目、将棋盤のマス目

碁盤

囲碁は19本の縦線と横線の交点に黒石と白石を交互に打って、自分の囲んだエリアの多い方が勝ちというゲームです。この交点のことを「目（め）」といい、「碁盤の目」とはこのことです。ちなみに、どちらのエリアにも属さない、つまりどちらにとっても価値のない目が「駄目（だめ）」です。

打った手順を記録したものを棋譜といいます。打たれた石は盤上から取り除かれることはあっても、移動することはないので、石の上に数字を書いて棋譜とすることができます。解説などで目を表すためには図1のように「A」と示すこともできますが、より一般的には線に番号を付け、座標表現を始めました。これは明治に入ってからのようです。左上を原点として、右に 1，2,･･･,19、下に一,二,･･･,十九 と数えます。例えば「A」は（13,三）です。諸説あるようですが、なぜこの向きの座標軸（第 4 象限）がとられたのかは不明です。

囲碁でも AI が人間を凌ぐ時代になりました。世界のプロ棋士を倒した AlphaGo は内部表現に第一象限を使っています。開発した Google 傘下の DeepMind 社は、イギリスの企業なので、チェスの棋譜を第一象限で表示してきた伝統に沿ったものか、コンピュータ科学が数学表現に準じているためでしょうか。

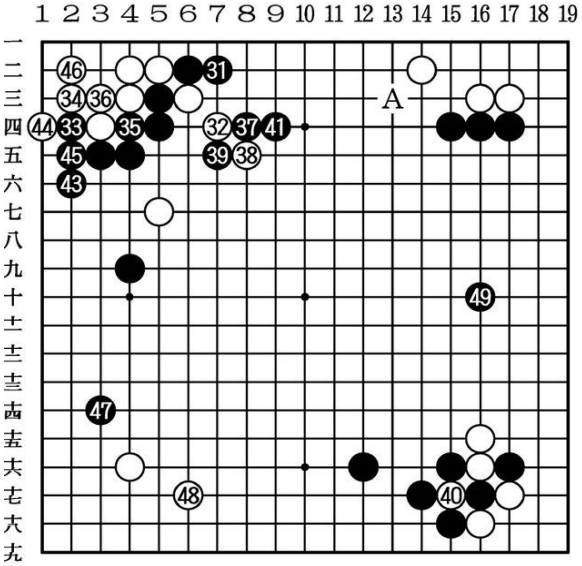


図 1

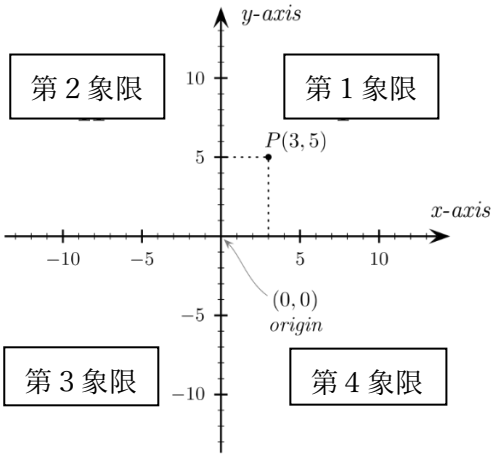


図2

京都市の住居表示

「碁盤の目」といえば、京都市を連想します。平安京の条坊制でデザインされて以来、これを拡張して現在の「碁盤の目」になっています。現在は、南北と東西に延びる路に「〇〇通（とおり）」という名称を付け、その交差点を基に住所を表記しているそうです。

例えば、京都市役所の住所は

京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地

です。「寺町通り」に面していて、「御池通り」より北にある（上ル…あがる）ということだそうです。ただし、

京都市中京区上本能寺前町 488 番地

でも良いのだそうです。町の構成は、通りを挟んだ向かい同士からなり、この中で番地を振っています。さすがに京都は何事にも深く複雑で、京都人ではない私が解説できるものではありません。言えることは、地図上の見た目にとどまらず、本当に「碁盤の目」と「通り」が街の基本的な構造になっているらしいということです。

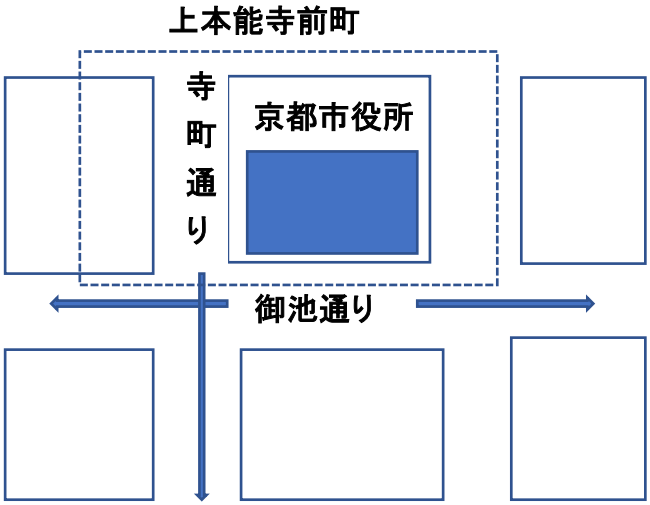


図3

将棋盤

将棋は9×9個のマス目の中に「金」や「銀」などの駒を置き、交互にこれを移動して相手の「王」を取るゲームです。駒の位置を表わすため、マス目に座標を設けます。先手から見て右上のマス目を(1,一)として、左へ　2, ･･･,9　上から下へ　二,･･･,九　と数字を振ります。例えば、図4の右下の「飛」は(2, 八)と表します。こちらは囲碁より早く、江戸時代からこの座標表現が使われています。

日本の文書は古くから縦書きで、行は右から左へ進みます。将棋はこの伝統にならったものと思われます。今では小説家もワープロで執筆する時代ですが、以前は原稿用紙を使って、右上から書き始めました。例えば、図2の原稿用紙で「飛」は二行目の8字目と表しますね。

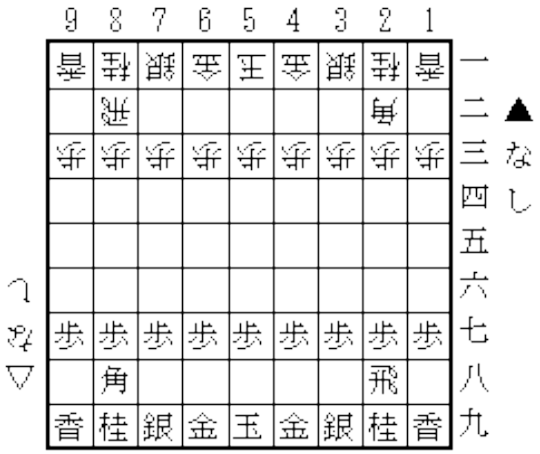


図4

図5

私が大学生のころ(なので、相当昔の話です)、木造建築の現場で下働きのアルバイトをしたことがあります。柱に切り込みをしたものを所定の位置まで担いで運ぶというものです。それぞれの柱には墨で「イ三」というように記号が書かれています。昭和の大工さんは説明なしのまま渡してくれるばかりなので、これは座標に違いないと思い、既に立っている柱の記号から「イ」の軸と「三」の軸を探して運ぼうとするのですが、困りました。理科系人間の私としては座標としては第一象限に違いないと、勝手に思い込んでいるので、うまくいかなかったのです。「大学生のくせにイロハもわからないのか！」と罵声が飛んできたことを今でも思い出します。そうなんです、大工さん達が使っていたのは正に将棋盤と全く同じ座標軸(第3象限)だったのです。

もちろん柱は線の交点にあるので、囲碁に準じていてもおかしくないと思いますが、昔の日本の座標表現は縦書き文化に基づく将棋方式だったのでしょう。

札幌市の住居表示

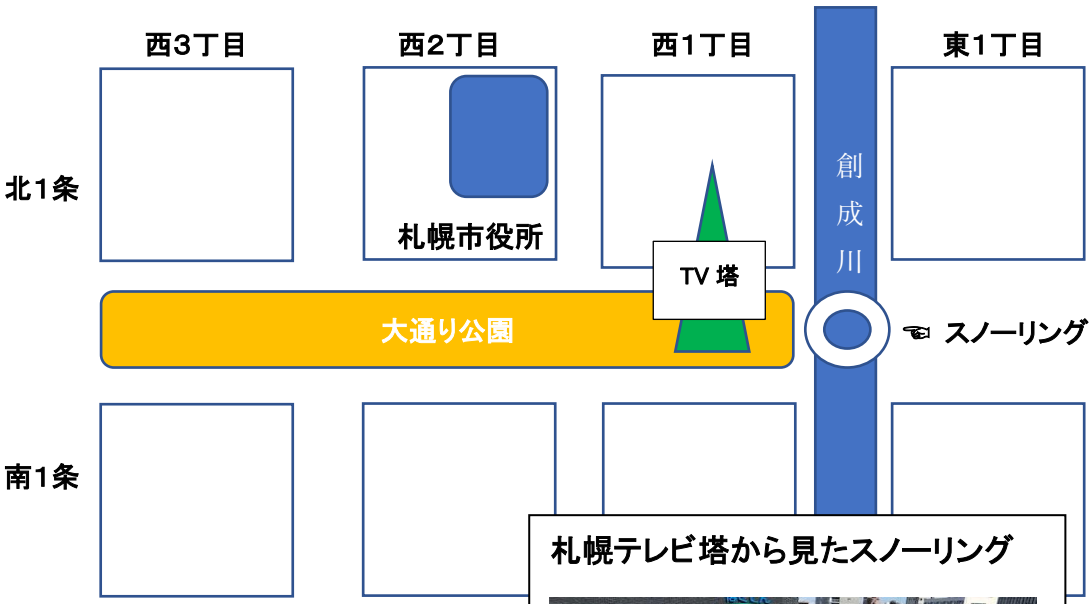
札幌市は京都市と同じ「碁盤の目」のようだといわれますが、それは地図上の見た目であって、住居表示の考え方は「将棋盤のマス目」で街区を指定しています。

基本的な構造は、大通り公園を東西の軸、創成川を南北の軸として、将棋盤的なマス目で街区を構成して、住居表示の基本としています。将棋盤の上と右に拡大し、マイナスを西、南と読み替えた全象限表示になっています。原点にあたる創成川の上にはスノーリングが設置されているのはご存じでしょうか。

ちなみに、札幌市役所の住所は、

札幌市中央区北１条西2丁目

です。南北を先に言うのは札幌方式で、同じような構造の帯広市では東西を先にして、西2条北1丁目とＸ軸を先に表記しています。



札幌テレビ塔から見たスノーリング

図と地

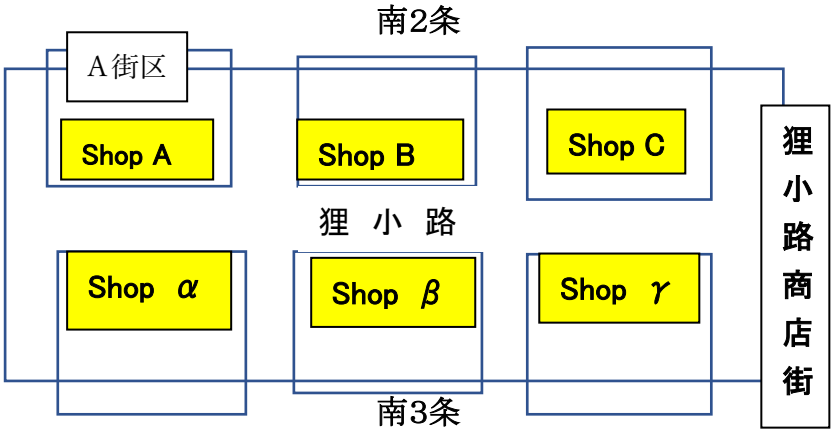
札幌市の住居表示では条丁目で作られたブロックの中で、さらに小路で別れた区画に番号を付け、さらにその中の建物に住居番号を付け

〇〇条〇〇丁目〇〇番〇〇号

と表示します。この時の附番ルールにはあのスノーリングが登場します。札幌市のホームページに興味深い解説が載っていますので、是非一度訪れてみてください。

https://www.city.sapporo.jp/shimin/koseki/jukyo-hyoji/jukyohyoji-toha.html

地図上の位置を表す意図からすると、ブロックを指定する街区も、帯状の通りを使うのも同じことのようですが、生活感から考えると通りの方が馴染みやすいのかもしれません。京都市が向かい合った家並みを同じ町名で表すように。実際、札幌でも通称「狸小路」は、南2条と南3条を分かつ通りに向かい合って並ぶ店からなる商店街なので、住居表示の街区を跨いでいます。「狸小路」の正式道路名は「市道南 2・3 条中通線」です。でも、ここではみんな、狸小路4丁目などと呼んでいますね。



地図上では、ブロックが図で通りは地として感じられますが、「ルビンの壺」のようにどちらに注目するのかで異なった意味が立ち上がることがあります。昔の庶民は高所から俯瞰する視点は持てなかったので、1次元的な通りで地図を認識し、政策的な視点を持った人が俯瞰的なブロックで区画を考え出したのだと思います。現代の我々は俯瞰的な訓練ができているので2次元的な区画で街を見ているように思いますが、どっこい、地下街は俯瞰的ではないので、どこの地下街マップにも通り名が必ずついていますね。